

高知方言における四つ仮名体系の動態

岸江信介・吉廣綾子・山口陽子

The Dynamics of the Difference of Pronunciation of Yotsugana
in the Kouchi Dialects

Shinsuke Kishie Ayako Yoshihiro Yoko Yamaguchi

Abstract

Yotsugana, four types [ʒi dʒi zu dzu] of Kana, used to be pronounced one another differently in the old Japanese. In modern Japanese, ʒi and dʒi, zu and dzu had merged together each other, four kinds of pronunciation as a result becomes two. But in the Kouchi dialects these four different pronunciation has been maintained. We investigated Kouchi dialects to know how much it's difference still remains.

We aim to clarify the regional and generational difference in the usage of Yotsugana in the Kouchi prefecture.

1. はじめに

高知方言は「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の四つの文字において音韻上の区別がある、いわゆる四つ仮名が存在することで知られている。しかし、高知県全域に残るとされていた四つ仮名も、伝統方言が失われつつある現在においては一体どのくらいその体系が保たれているのだろうか。

柴田(1978)では、四つ仮名が高知県のほか、九州の鹿児島・宮崎・大分・佐賀・福岡の各県各地と、和歌山県南部、三重県の和歌山寄りの南部、そして山梨県の奈良田に残っているとし、九州方言と高知方言の四つ仮名体系の比較をしつつ、それぞれの地域の特徴について興味深い指摘をした。九州方言では「じ」と「ぢ」を[ʒi] (摩擦音) と[dʒi] (破擦音)、「ず」と「づ」を[zu] (摩擦音) と[dzu] (破擦音) で区別しているが、一方、高知方言ではそれぞれ[ʒi] (摩擦音) と[di] (破裂音)、[zu] (摩擦音) と[du] (破裂音) で区別する傾向があると述べている。つまり「ぢ」や「づ」の発音が破擦的か破裂的かといった違いである。大友(1963)の『『ぢ』『づ』の子音は破裂音[d]から[dʒ][dz]と破擦音化した』という歴史的変遷に関する仮説にしたがうとすると、四つ仮名の発音に関して、高知方言は九州各地の方言よりも古い時代に行われた発音に近い形を残しているのではないかということもできよう。

ところで、九州の大分県に限っては「三つ仮名」方言が存在するという。「じ」と「ぢ」の音韻としての区別は失われ、音声としては[dʒi]~[ʒi]となっている。一方、「ず」と「づ」は音韻的に区別が残され、「ず」[zu] (摩擦音) と「づ」[du] (破裂音) で区別が保たれている。このことから、高知方言においても四つ仮名の区別が消失する過程において地域によっては大分県と同じような三つ仮名の体系が存在するところがあるのではないかと、まして愛媛・香川・徳島の「2つ仮名」地帯と接しているので一層その可能性が大きいのではないかと考え、今回の調査を試みた。高知市から足摺岬までの沿岸部グロットグラム調査をもとに、まず海岸部の動態について考察し、ついで、高知県西部の山間部調査の結果についての考察を行うことにする。

2. 調査の概要

①調査地点

調査地点は、第1回目は高知県足摺岬から高知市までの海岸線にある地域、第2回目～5回目は山間部の地域を中心に選んだ。高知県東部沿岸地域(東洋

町から作喜浜)は今回調査対象地域としなかったので考察地域には含めていない。調査地点は沿岸部が9地点、山間部が10地点、合計19地点である。

沿岸部(9地点):高知市・中村市・土佐市・須崎市・高岡郡窪川町
高岡郡中土佐町・幡多郡佐賀町・幡多郡大方町・土佐清水市
山間部(10地点):安芸郡馬路村・高岡郡葉山村・高岡郡越智町
高岡郡檮原町・高岡郡仁淀村・宿毛市・幡多郡西土佐村
幡多郡十和村・土佐郡本川村・土佐郡土佐町

②調査日程

調査は2003年の9月から11月に5回にわたって行なった。海岸部の調査は9月に行った「高知県高知市～土佐清水市間グロットグラム調査」の中の音声項目の部分である。山間部の調査は9月～11月に日程を4回に分け、各地域を回った。

③話者情報

その地域特有の言葉を必要としたことから、話者の方は、なるべくその地域で生まれ育ち、外へ移住したことの少ない高知県人を対象に選んだ。しかし、調査の都合上やむをえず、戦争や学生の時分、または仕事のために外へ出たことがあるという方をお願いした場合もある。

④調査方法

調査依頼は、第1回目の沿岸部の調査においては、高知県市町村の教育委員会に依頼し、話者を斡旋して頂いた。第2回目以降の山間部調査では山口独自による調査で山口自身が各地域に直接赴き、偶然道端で出会った人に声をかけたりその辺りに昔からありそうなお宅を訪問したりして、ほぼ飛び込み調査に近い形式での調査となった。沿岸部では各地域の少年層・青年層・中年層・老年層から一人ずつ、計4名を対象とした。山間部では各地域の老年層一人を対象としている。

調査は主に、教育委員会や話者の方のご好意で先方の部屋をお借りして行なうことが多かったが、2回目以降の調査では屋外で行った場合もある。調査票に基づく面談形式で、DATテープで録音しながら行っている。

⑤調査項目

＜沿岸部調査票＞

項目数は全部で 12 項目から成り、うち 3 項目が話者の内省項目から成る。

- ＜じ＞ 「字」・「富士」
- ＜ぢ＞ 「痔」・「藤」・「鼻血」
- ＜ず＞ 「葛」・「雀」
- ＜づ＞ 「屑」・「缶詰」

*内省項目 「字」と「痔」・「富士」と「藤」・「葛」と「屑」

＜山間部調査票＞

項目数は全部で 31 項目から成り、内 14 項目が話者の内省項目からなる。沿岸部の調査で用いたものより項目数が増やし、さらに詳しく調べた。「人参」「缶詰」等の「ん」が四つ仮名の前にある言葉を増やした。また、語頭に四つ仮名のつく「字」「痔」や、「絆」「稲妻」など表記にゆれがあると思われるものについては内省項目を設けた。

- ＜じ＞ 富士・人参・蜆
- ＜ぢ＞ 藤・地震・鼻血・縮む
- ＜ず＞ 鈴・雀・鼠
- ＜づ＞ 水・絆・稲妻・小豆・缶詰・鼓・三日月

*内省項目 「字」と「痔」・「富士」と「藤」・「鈴」と「水」

- ＜じ＞字・富士・人参
- ＜ぢ＞痔・藤・地震
- ＜ず＞鈴
- ＜づ＞水・絆・稲妻・小豆

3. 四つ仮名の音響的分析方法

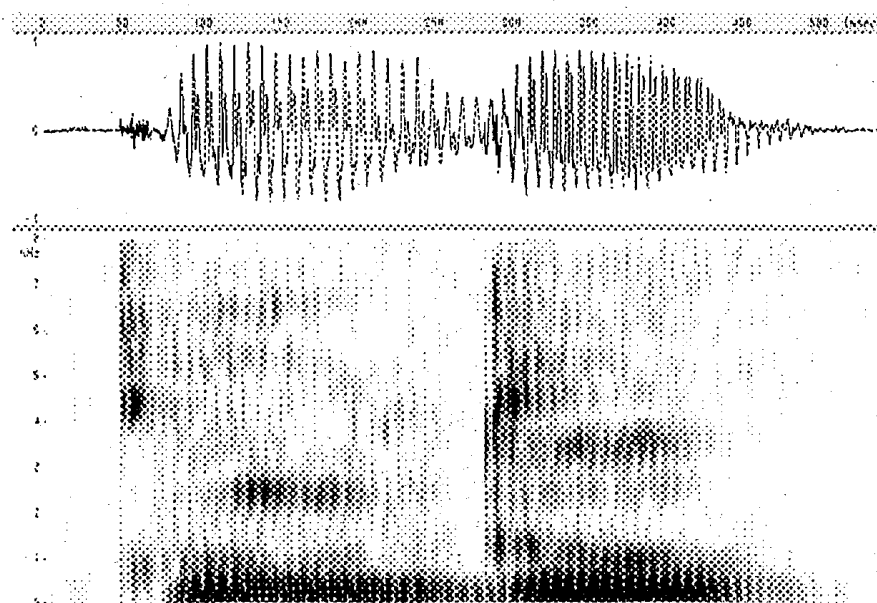
高知方言の「じ」「ぢ」には [di] ([~di])・[dzi] ([~dzi])・[zi]、「ず」「づ」には [du] ([~du])・[zu]・[dzu] ([~dzu]) の内のいずれかが用いられるが、これら [d][z][dz][z][dz] の 5 つの子音にどのような発音上の特徴があるのか、その発音の過程を以下に整理してみることにする。

今回の調査では話者の声を DAT(デジタルオーディオテープ)に録音した後、音声分析ソフト SUGI Speech Analyzer を利用して分析した。実際にこれらの子音を SUGI Speech Analyzer で分析した場合、どのような特徴が表れるだろうか。話者の音声を発音ごとに分類して比較してみる。

以下例、1~5のスペクトログラムを見ると、①の破裂音[d] ([~d])、③・⑤の破擦音[dʒ] ([~dʒ])・[dz] ([~dz])では、調音器官を閉鎖の状態にしてから、空気の圧さくを行なってから開放するので、直前の音との間に空白の部分ができる。一方、②・③の摩擦音[ʒ][z]では、調音器官は閉鎖の状態にならないので、直前の音と連続して摩擦が起こっている。5~7 kHz 辺りの色の濃い部分が摩擦である。

さらに、①の破裂音と③・⑤の破擦音は、スペクトログラムを見ても区別をつけにくい。破裂音と破擦音は明らかに音が異なるので、こちらは耳で聞きわけた方が早いと思われる。[du] ([~du])は「ドウ」、[di] ([~di])は「デイ」と聴こえる。今回の調査結果の分析においても、破裂音と破擦音、摩擦音の違いはSUGI Speech Analyzerと自分の聴覚に頼る部分とを使い分けた。

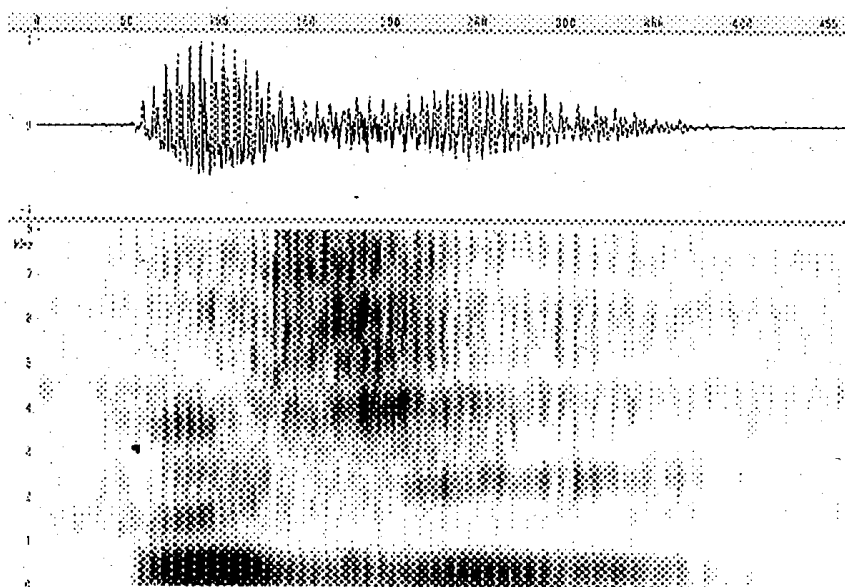
①破裂音[d] ([~d]) <例1 「屑(くづ)」>



(須崎市・老年層A)

②摩擦音[ʒ]

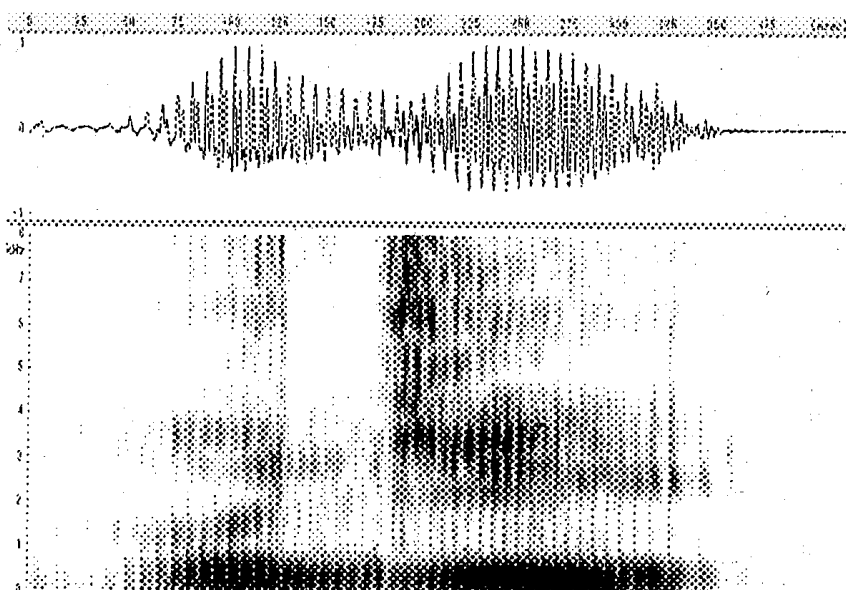
<例2 「富士(ふじ)」>



(土佐町・老年層B)

③破擦音[dʒ] ([ʔdʒ])

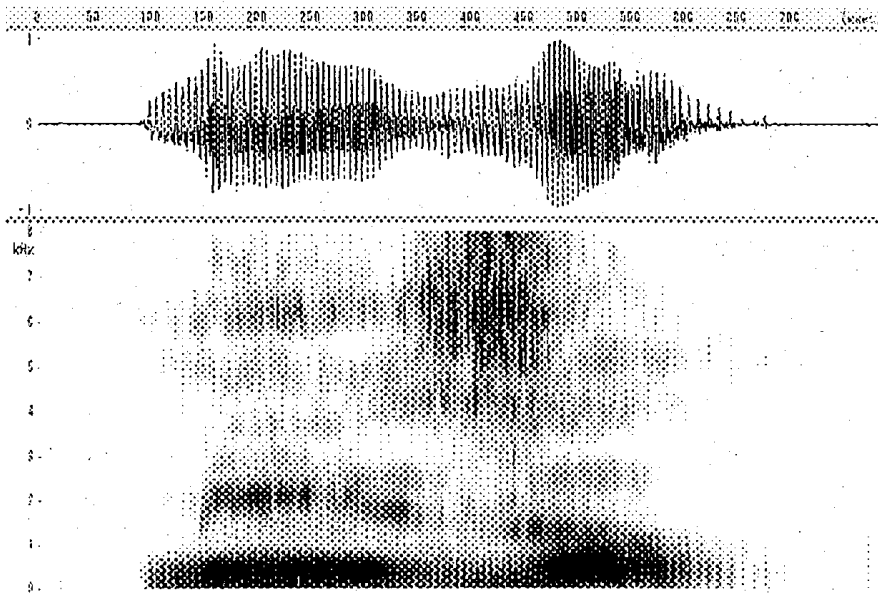
<例3 「藤(ふぢ)」>



(土佐町・老年層B)

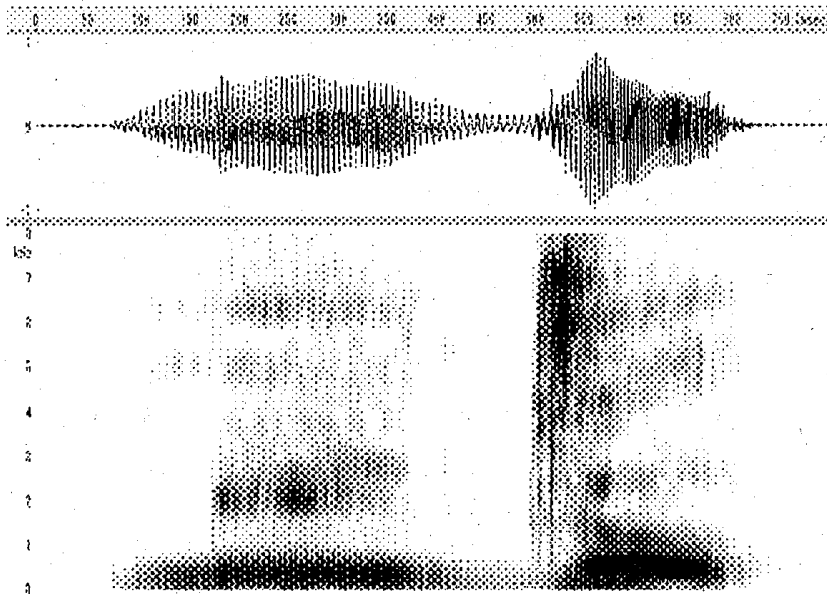
④摩擦音[z]

＜例4 「水（みず）」＞



（西土佐町・老年層C）

⑤破擦音[dz] ([~dz]) <例4 「水（みづ）」>



（西土佐町・老年層C）

4. 高知県沿岸部の四つ仮名分布

I. 「じ」と「ぢ」

①「字」と「痔」(内省)：発音の区別に地域差はなく、どの年齢層でも区別がある人となない人が混在している。やや「区別がある」と答えた人の数が多かった。一文字の単語において共通語ではどちらも破擦的な傾向が見られるため、「区別がない」の人が多いたと思っていたが、予想外の結果だった。薬局の広告等で「痔」を「ぢ」と表記しているのを目にする機会が多々あるからだろうか。青年層・少年層にも「区別がある」と答えた人が多い。

②「富士」(音声)：どの年齢層でも大半が旧仮名遣い通り、[ʒi]と発音している。ただし、語中の「じ」は標準語においても[ʒi]と発音されるため、四つ仮名の特徴を残しているとは言い切れない。違う発音をしたのは、土佐清水市の老年層、高知市と土佐清水市の壮年層、土佐市の青年層の4人だけだった。

③「藤」(音声)：大半の話者は[ʒi]と答えた。また、過去の資料で高知方言の「ぢ」の発音だとされていた[di] ([~di])の答えは全くいなかった。

④「富士」と「藤」(内省・音声)：表4の内省の結果では「区別がある」と答えた人が老・壮・青年層で約半数、少年層では7名中5名もいたが、表5の音声と比較してみると老年層では半数いたものの、後の年齢層では各1名ずつだった。これは、アクセントの違いと混同してしまった人が多数いたからだと思われる。土佐清水市の老年層・壮年層、高知市の壮年層では、発音に差はあったものの、「じ」が[dʒi] ([~dʒi])、「ぢ」が[ʒi]で旧仮名遣いとは逆であった。これは[dʒi] ([~dʒi])と[ʒi]の区別が薄れたために起きた現象だろうか。

⑤「鼻血」(音声)：この語は現在でも「ぢ」という表記をするからだろうか、他の項目と比較して[dʒi] ([~dʒi])を使用する人が極めて多かった。老年層では9名中8名、壮年層では9名中9名、青年層では9名中8名、少年層では8名中6が[dʒi] ([~dʒi])と発音している。地域による差は特にない。この質問でも[di] ([~di])という回答は全く無かった。

II. 「ず」と「づ」

①「葛」(音声)：ほとんどの話者が旧仮名遣い通り[zu]と回答した。ただ、植物の葛に馴染みの無い人も多く、普段している発音とは言い固いケースもしば

しばあった。馴染みの無い発音である場合、語中なので標準語と同じように [zu] を使用するのではないだろうか。[dzu] ([~dzu]) と回答したのは、中土佐町の老年層と須崎市の壮年層、高知市の少年層の3名だった。

②「屑」(音声)：旧仮名遣いでは [du] ([~du]) であるが、新仮名遣いの影響だろうか、[zu] と発音する話者が多かった。しかし、中土佐町と須崎市の老年層には [du] ([~du]) が見られるので、老年層においてはまだ「ず」と「づ」の区別は残っているものと考えられる。他に、土佐清水市の壮・青年層、中村市の少年層と須崎市の少年層に [dzu] ([~dzu]) が見られる。語中の「づ」なので、この単語を [dzu] ([~dzu]) と発音するのは、「ず」と「づ」を使い分けているという判断材料になるのではないだろうか。地域別にみると、土佐清水市によく区別が現れている。

③「葛」と「屑」(内省・音声)：老年層3名、壮年層5名、青・少年層各1名で「区別がある」と回答している。これもアクセントが異なるために間違えた人が多かったのだろうか。音声を比較した際に区別があったのは、須崎市老年層・少年層、土佐清水市壮年層・青年層、中村市少年層だった。須崎市壮年層、高知市少年層は、区別はあったが旧仮名遣いとは逆の発音だった。

④「雀」(音声)：共通語では「すずめ」の「ず」は母音が省略されて子音のみの [z] になるが、高知では母音をはっきりと発音するため、「ず」は [zu] となる。このような場合に [dzu] ([~dzu]) という発音が表れることがあるのかどうか調べるための質問項目である。

土佐清水市の老年層の [zu] («その他」)として表示) と土佐市の少年層を除いて、他は全員が [zu] であった。年齢層・地域差はない。青年層・少年層には [u] の母音を省略している者も時々あった。

⑤「缶詰」(音声)：この項目で注目すべき点は、老年層に [du] ([~du]) が3名もいることである。高知方言は [g], [d] の子音の前に鼻音が入る傾向があるので、「ん」の後には [du] ([~du]) が出やすくなるのだろうか。壮年層では6地点中4ヶ所・青年層では7地点中6ヶ所・少年層では7地点中4箇所で破擦音だった。

5. 高知県山間部の四つ仮名分布

1. 「じ」と「ぢ」

① 字と痔 (図1～3)

文字の「字」は全地点で「ジ」の発音だという回答を得た。一文字の言葉は破擦音化しやすいが、高知では摩擦音だという認識が強い。一方、「痔」の方は「ヂ」が宿毛市、葉山村、越智町、馬路村の四地点で、「ジ」が残りの6地点と、半分に分かれた。「ヂ」と答えた地域より、「ジ」と答えた地域が県境に近い。

しかし、それぞれの単語の内省と両方を比較しての内省ではズレが生じた。一番最初の質問であったために、意図が伝わらず、単語のほうの回答では記述する場合にどの文字を使うかを回答してしまった場合があったのかもしれない。すべての回答が一致して、「区別がある」としているのは、葉山村と越智町の2地点。「区別がない」としたのは、十和村、檜原町、本川村の3地点。あとの5地点はズレが生じている。

② 図4. 5の「富士」(ふじ)について考察すると、全地点とも、話者の内省・音声とも「フジ」で一致している。一方6. 7の「藤」(ふぢ)になるとバラつきがみられる。図6の内省では本川村・土佐町・葉山村の3地点が旧仮名遣いに沿った「フヂ」という回答で、あとの7地点では「フジ」であった。図7の音声は先述の3地点と西土佐村の合わせて4地点が[dʒi] ([ˈdʒi])で、内省の回答とほぼ一致している。

図7. 8の「富士」と「藤」の発音の区別についての設問においても全10地点中、同4地点が「区別がある」と解答している。山間部には四つ仮名の区別がまだ残っていると予測していたが、老年層においても「富士」「藤」の区別ができる人は少なくなっている。

③ 図10より、「人参」は「じ」の前に撥音の「ん」が入るので、破擦音化するだろうと予想していたが、実際には土佐町と仁淀村の二地点だけで、あとは摩擦音だった。話者の内省でも、全地点が「じ」になっている。

④ 「地震」は現在の標準語では「じしん」と書かれ、すでに一語化しているが、旧仮名遣いでは「ぢしん」と書かれた。図12の話者の内省では、ちょうど5地点ずつに分かれた。内省で「ジシン」と回答のあった越智町と馬路村では発音は[dʒi]になっているが、これは語頭の「ジ」であったためかもしれない。

⑤図16の「縮む」は図14の「蜷」と同じような単語の構造であるのに、摩擦音だけでなく破擦音の地域がある。区別があるのは西土佐村と仁淀村、土佐町の三箇所である。この場合の[dʒi] ([ˈdʒi])は、簡単に発音できる[ʒi]を取らなかったという点から、明らかな区別であるといえるだろう。

⑥図15から「鼻血」の発音は10地点中、西土佐村・十和村・仁淀村・土佐町・宿毛市・葉山村・越智町の7ヶ所が[dʒi] ([ˈdʒi])で、他の3ヶ所が[ʒi]だった。「鼻血」の項目は沿岸部の調査で高い正解率だったが、山間部では間違いが目立つ。現在でも「ぢ」で表記する言葉なので、これを間違えた地点では「じ」「ぢ」の区別が弱まっていると考えられるのではないだろうか。

II. 「ず」と「づ」

①図19, 20より、話者の内省では西土佐村と土佐町を除いて、全員が「ミズ」だった。西土佐村と土佐町の老年層は、二人とも『昔は「みづ」だったが、今は「みず』』と話していた。だが、実際の発音では宿毛市に[dzu] ([ˈdzu])、仁淀村に[du] ([ˈdu])が残っていた。本川村のその他は摩擦が弱く、[su]に聴こえた。

②「ず」と「づ」の比較は、沿岸部では「屑」と「葛」で行なったが、どちらもあまり馴染みの無い単語だったため、山間部の調査では、「鈴」と「水」(図21, 図22)に項目を変更した。同音でないので、意味上の区別の有無は確認できなかったが、内省においても、音声上の比較においても、西のほうの地域で区別がある、という結果になった。

③「絆」は元々「気+綱」であり、「きづな」と表記されていたが、最近では一語化している。標準語の中でも「きずな」か「きづな」かで表記にユレがある。図23, 24より高知県においても、内省・音声共にちょうど半分に分かれている。内省の分布と発音の分布も一致している。

④「絆」と同じく、「稲妻」も現在の標準語において、「いなづま」か「いなづま」で記述方法にユレのある言葉である。図25の内省において、「いなづま」は10地点中6地点で「いなづま」とほぼ互角である。四つ仮名の残る高知では「づ」が優勢かと予想していたので、意外であった。図26より発音では「い

なづま」が8地点中6地点と優勢で、破裂音[du] ([~du]) も土佐町と葉山村にある。

⑤図27より、「小豆」(あづき) は内省では全く見られない。しかし、発音では[dzu] ([~dzu]) が西土佐村, 土佐町, 葉山村, 本川町の計4地点が存在する。これは、現代仮名づかいの「あずき」に慣れてしまったために起こったのだろうか、あるいは無意識の内に使い分けているのだろうか。

⑥「鼠」(ねずみ) の発音は、図30より、仁淀村・本川町・馬路村の三地点で[dzu] ([~dzu]) だが、他の7地点は[zu]であった。[dzu] ([~dzu]) の発音はゾンザイに発音すれば[zu]になるが、[zu]を[dzu] ([~dzu]) と発音するためには舌の動きを増やさなければならないため、[zu]の出現率が高いのだろうか。

⑦沿岸部の調査でも「缶詰」(かんづめ) の項目で[du] ([~du]) が出たが、図31より、山間部でも葉山村と仁淀村の2地点に[du]が表れた。やはり、撥音便「ん」の後には破裂音がしやすいようだ。恐らく、撥音で調音器官の閉鎖が起こるからではないだろうか。

⑧「鼓」(つづみ) でも図32より、やはり[du] ([~du]) の音が出た。「縮む」の項目でも考察したが、先の子音が[t]であることが関わっているのではないだろうか。

⑨「三日月」(みかづき) は「三日」と「月」の複合語である。図33より西土佐村を除く全ての地点で[dzu] ([~dzu]) の破擦音だった。

6. まとめと今後の課題

沿岸部では、高知市から足摺岬に向かって南に行くほど四つ仮名の区別が残っているのではないかと思っていたが、明白な地域差はなかった。また、[di] ([~di])・[du] ([~du]) という破裂音による四つ仮名の区別がどこかに残っているだろうと推測していたが、破裂音は須崎市・窪川町・佐賀町・中土佐町の老年層に[du] ([~du]) があったのみで、[di] ([~di]) はどの地域のどの年齢層から見つからなかった。さらに、破裂音・破擦音を使うべき言葉に摩擦音

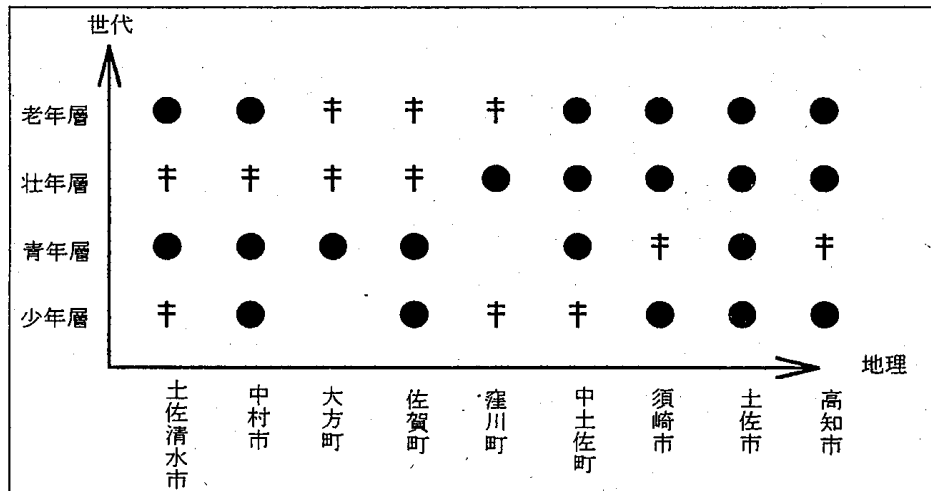
を使い、摩擦音を使うべき言葉に破擦音を使うといった逆転現象もみられたが、これは「ジ」「チ」の区別が失われつつある傾向にあることがうかがえる。

山間部でも、やはり[du] ([~du]) はあったが[di] ([~di]) は見られなかった。山間部でも破擦音化がかなり進行しているようだ。山間部の中で特に四つ仮名を意識して話している印象を受けたのは葉山村・仁淀村・西土佐村・土佐町だった。

今後の課題としては、今回見つけた破裂音の使用地域を追跡調査し、今後の四つ仮名方言がどのように変化していくかを見届けたい。

7. 参考文献

- 岡崎有鄰 (1957) 「幡多方言」第4号
土居重俊 (1958) 『土佐言葉』高知市立市民図書館
大友信一 (1963) 『室町時代の国語音声の研究』至文堂
柴田 武 (1978) 『方言の世界』平凡社
土居重俊 (1980) 「高知県における四つ仮名の区別について」『高知大学教育学部研究報告』1巻22号
土居重俊 (1982) 「土佐の方言」『高知の研究』第6巻方言・民俗篇 精文堂
浜田和義 (1982) 「幡多言葉について」『高知の研究』第6巻方言・民俗 精文堂
山田幸宏 (1982) 「高知方言の音声的特徴」『国語学』133集
松坂ヒロシ(1986) 『英語音声学入門』研究社出版
城生佰太郎(1988) 『音声学 新装増訂三版』アポロン
久野マリ子・久野 眞・大野眞男・杉村孝夫 (1991) 『四つ仮名方言の動態と意識』國學院大學日本文化研究所
石井直樹 (2002) 『音声工房を用いた音声処理入門』コロナ社
仙波光明・岸江信介・石田祐子編 (2002) 『徳島方言言語地図』徳島大学国語学研究室



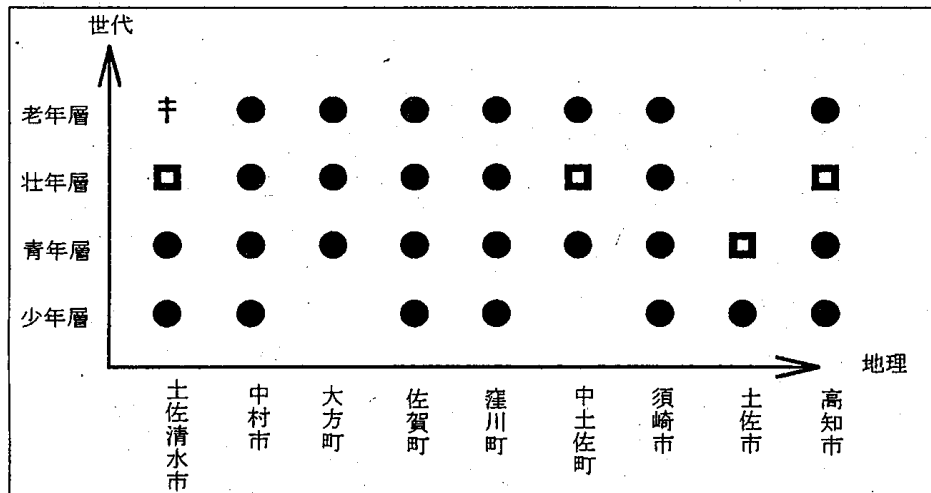
じ・ぢ

質問項目
字と痔
(内省)

表1

質問 鉛筆で書く「字」と病気の「痔」とは発音が同じですか、違いますか。

- 凡例
- 区別がある
 - ㄗ 区別がない
 - ◇ 分からない



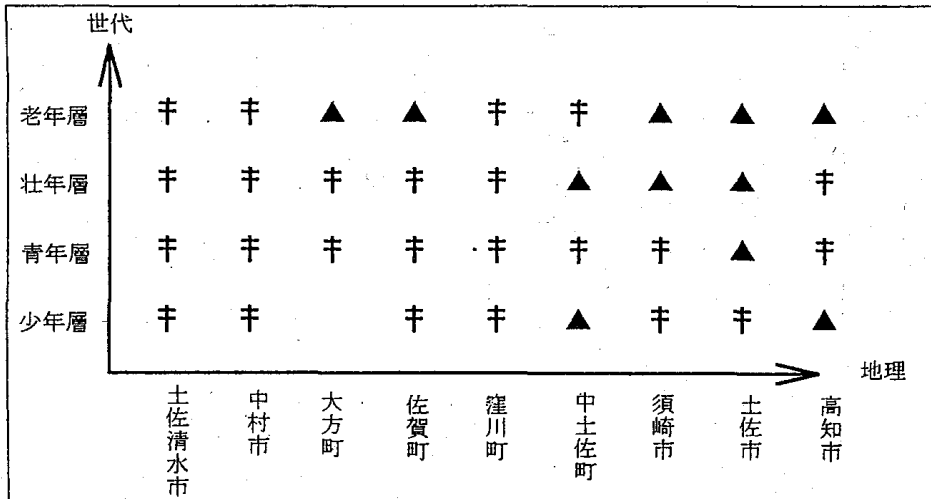
じ・ぢ

質問項目
富士
(音声)

表2

質問 日本一高い山です。

- 凡例
- [ɕi]
 - [dɕi] ([ˈdɕi])



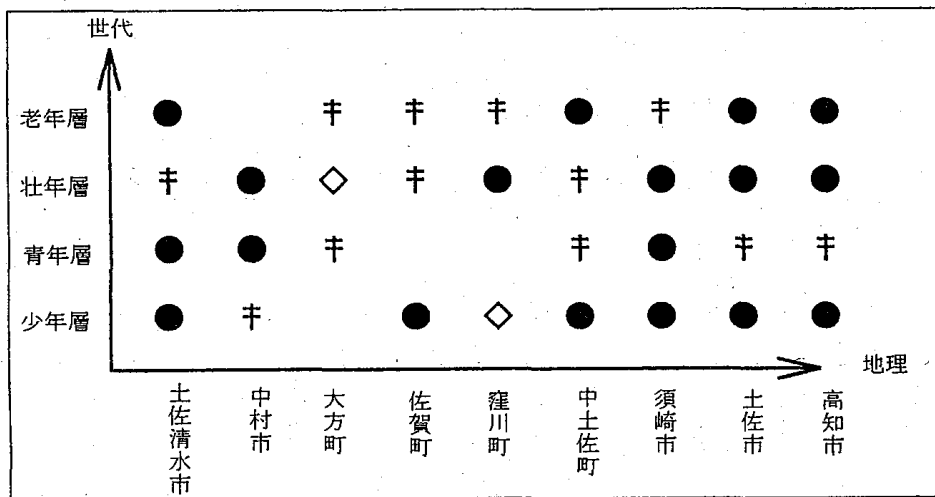
じ・ぢ

質問項目
藤
(音声)

表3

質問 5月～6月に咲く淡い紫色の花で、よくこの色は藤色といわれます。

★ [di] ([˜di])
凡例 ▲ [dʒi] ([˜dʒi])
𠂔 [ʒi]



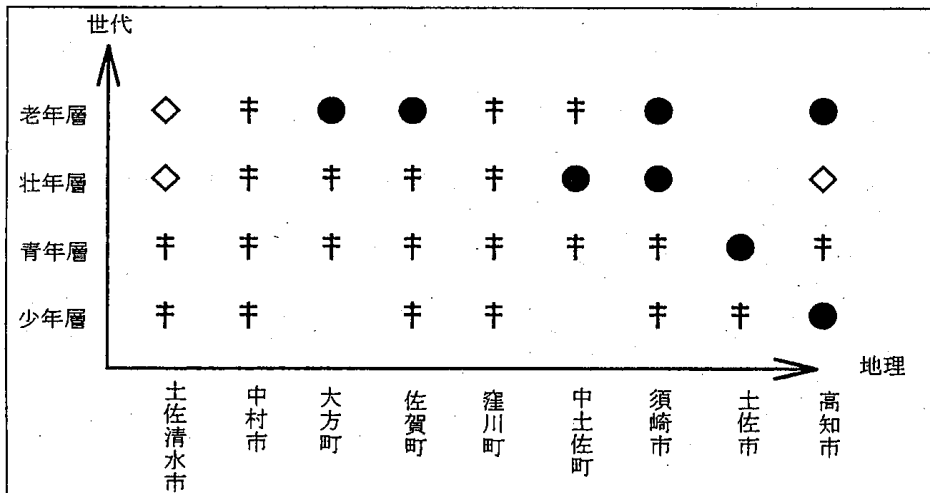
じ・ぢ

質問項目
富士と藤
(内省)

表4

質問 「富士」と言う場合の「ジ」と植物の「藤」の「ヂ」とは発音が同じですか、違いますか。

● 区別がある
凡例 𠂔 区別がない
◇ 分からない



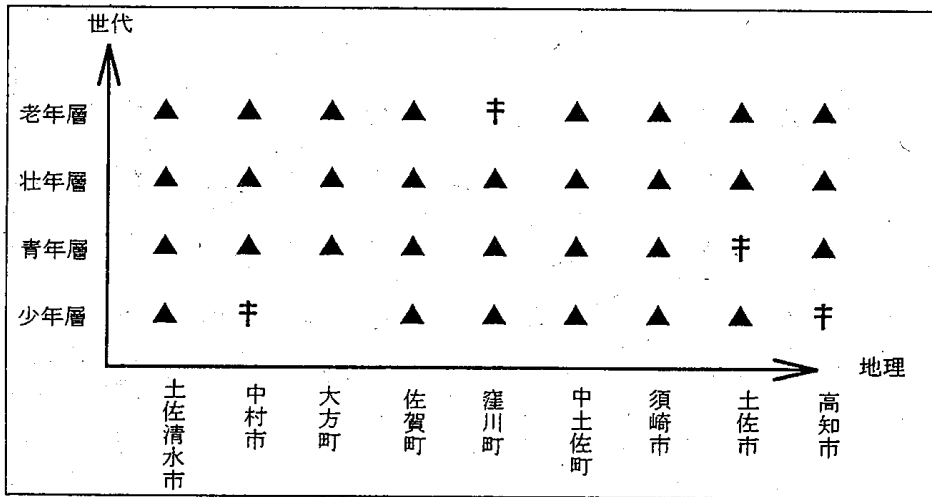
じ・ぢ

質問項目
富士と藤
(音声)

表5

質問 「富士」と言う場合の「ジ」と植物の「藤」の「ヂ」とは発音が同じですか、違いますか。

凡例 ● 区別がある
キ 区別がない
◇ あるが逆である



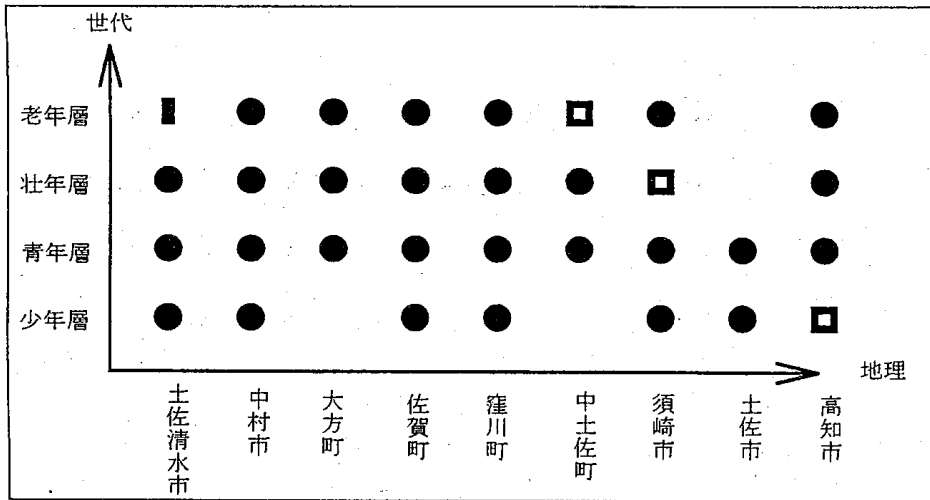
じ・ぢ

質問項目
鼻血
(音声)

表6

質問 鼻を打ったりすると、突然血が出ますが、この血を何といいますか。

凡例 ★ [di] ([~di])
▲ [dzi] ([~dzi])
キ [zi]



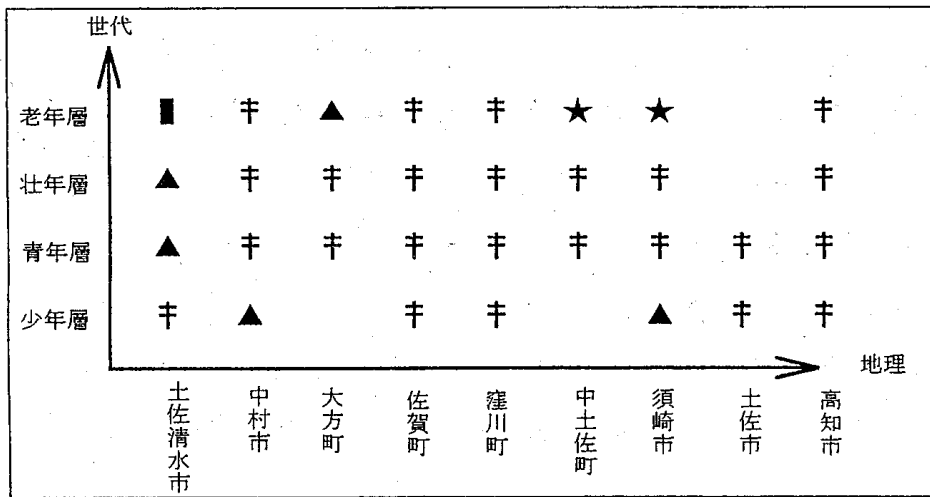
ず・づ

質問項目
葛
(音声)

表7

質問 植物です。くず餅にすることもあります。この植物を何と言いますか。

凡例 ● [zu]
□ [dzu] ([~dzu])
■ その他



ず・づ

質問項目
屑
(音声)

表8

質問 ゴミ箱に捨てるのはゴミです。木を削ったりしたときにでるのは、木の何ですか。

凡例 ★ [du] ([~du])
▲ [dzu] ([~dzu])
𠄎 [zu]
■ その他

世代									
↑									
老年層	キ	●	キ	●	キ	●	◇	◇	●
壮年層	キ	●	◇	キ	●	キ	●	●	●
青年層	●	◇	●	キ		キ	キ	キ	キ
少年層	キ	キ		キ	◇	●	キ	●	キ
	土佐清水市	中村市	大方町	佐賀町	窪川町	中土佐町	須崎市	土佐市	高知市
	→ 地理								

ず・づ

質問項目
葛と屑
(内省)

表9

質問 植物の方の「葛」の「ズ」と「屑」の「ヅ」とは発音が同じですか、違いますか。

凡例 ● 区別がある
 キ 区別がない
 ◇ 分からない

世代									
↑									
老年層	キ	キ	●	キ	キ	●	●		キ
壮年層	●		キ	キ	キ	キ	◇		キ
青年層	●	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
少年層	キ	●		キ	キ		●	キ	◇
	土佐清水市	中村市	大方町	佐賀町	窪川町	中土佐町	須崎市	土佐市	高知市
	→ 地理								

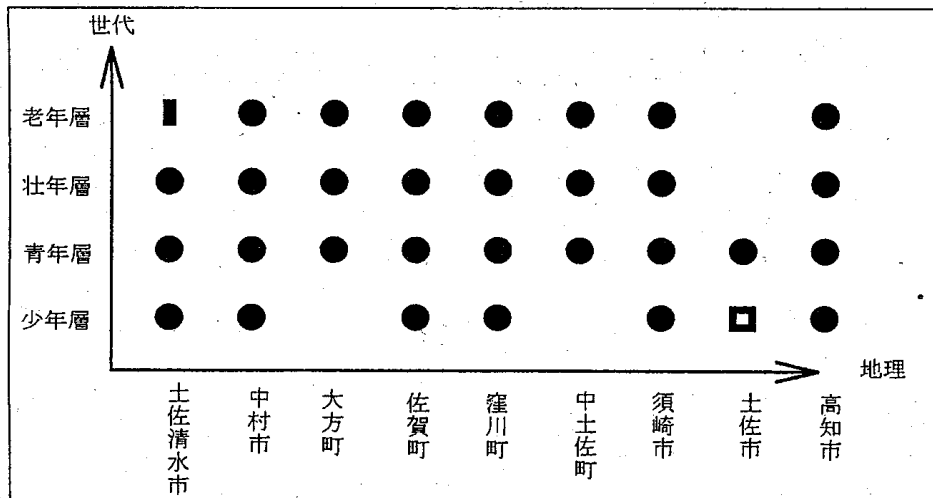
ず・づ

質問項目
葛と屑
(音声)

表10

質問 植物の方の「葛」の「ズ」と「屑」の「ヅ」とは発音が同じですか、違いますか。

凡例 ● 区別がある
 キ 区別がない
 ◇ あるが逆である



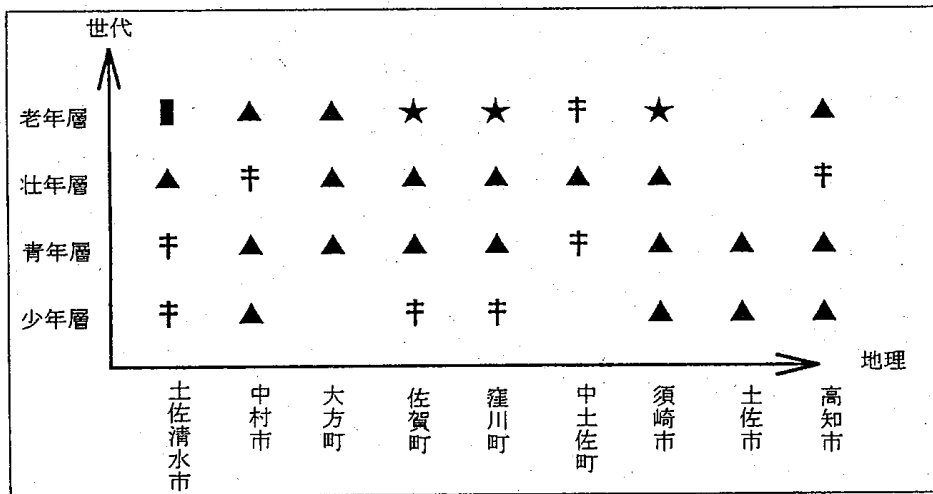
ず・づ

質問項目
すずめ
(音声)

表11

質問 チュンチュン鳴く小さな鳥です。電信柱によく止まっています。何といいますか。

凡例 ● [zu]
□ [dzu] ([~dzu])
■ その他



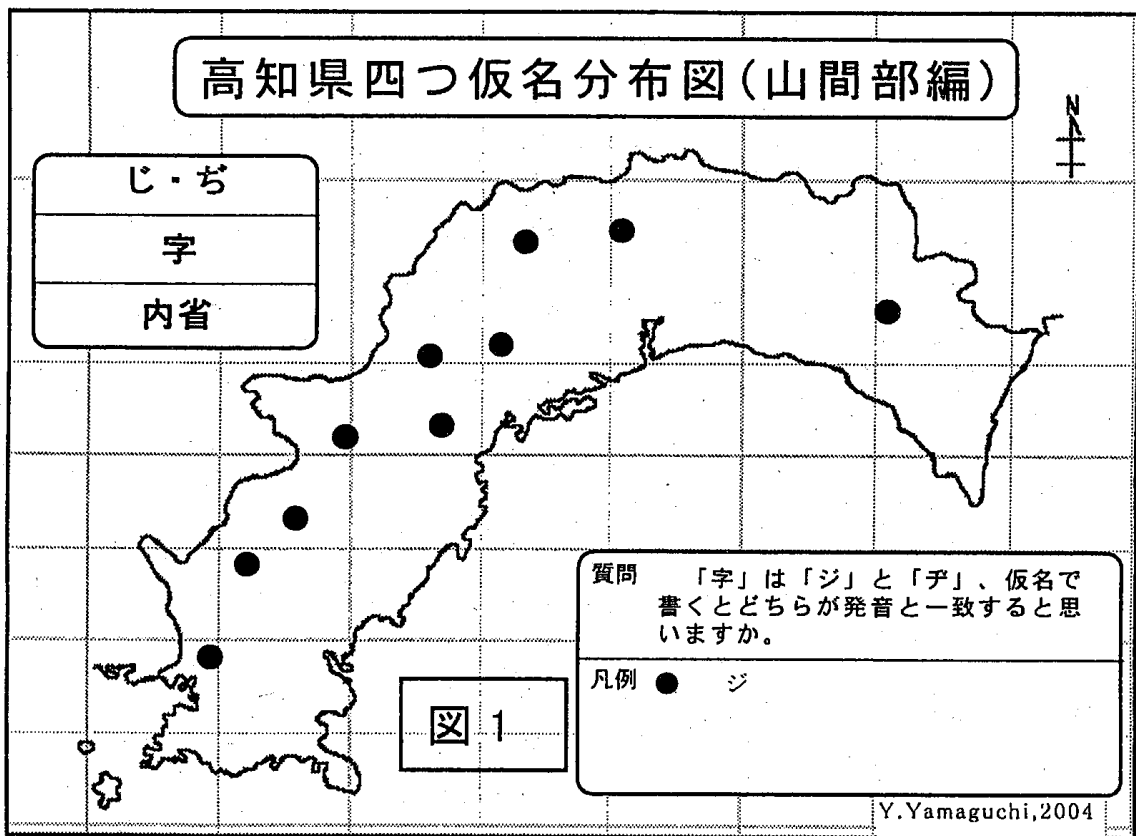
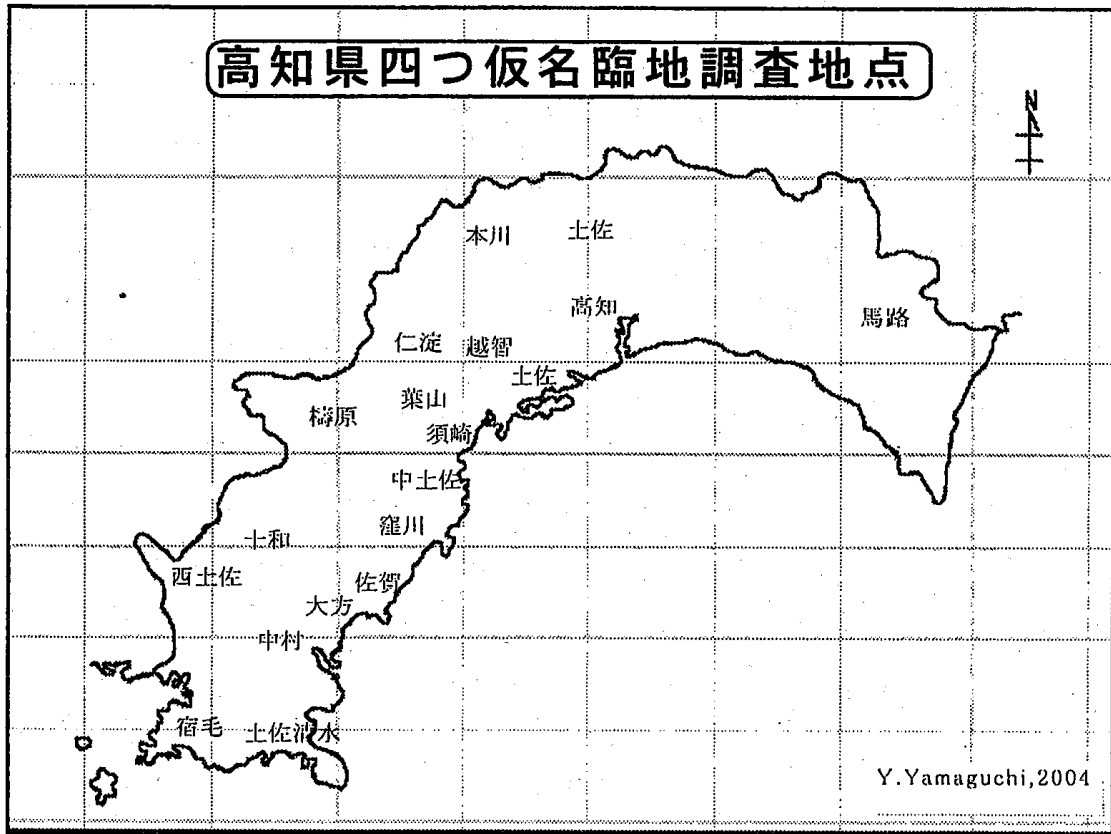
ず・づ

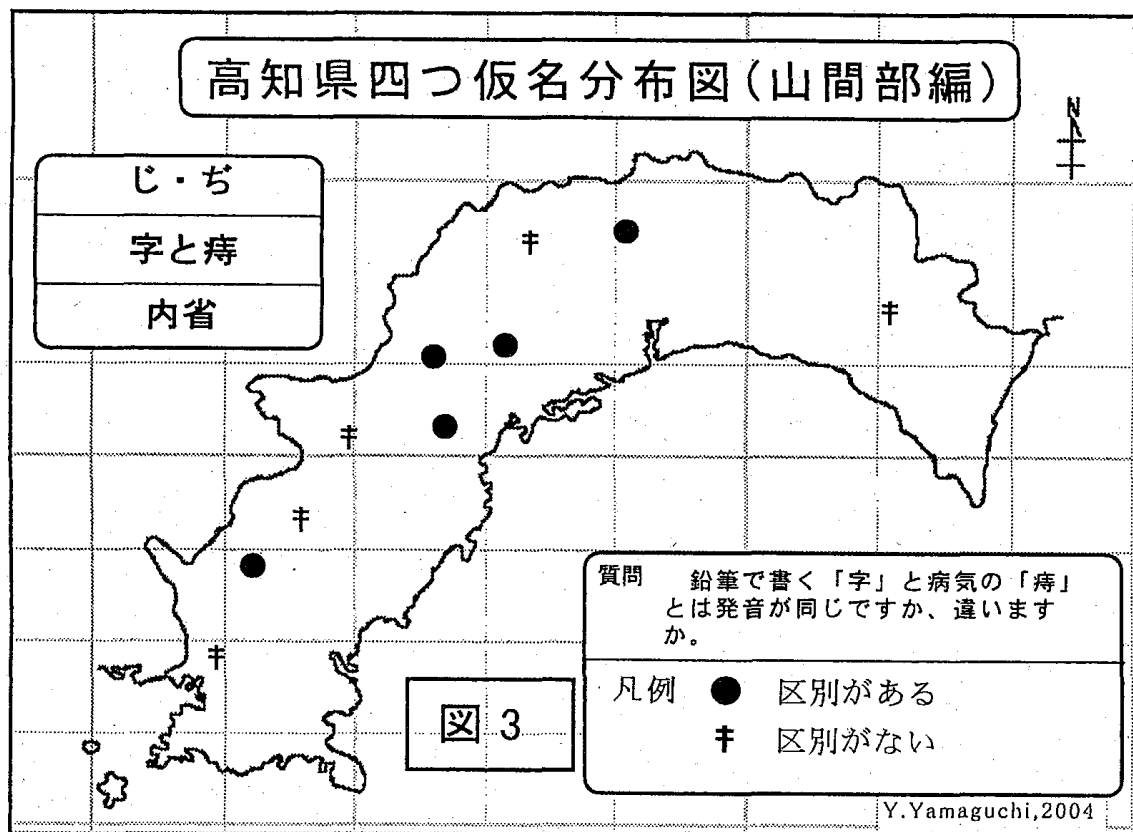
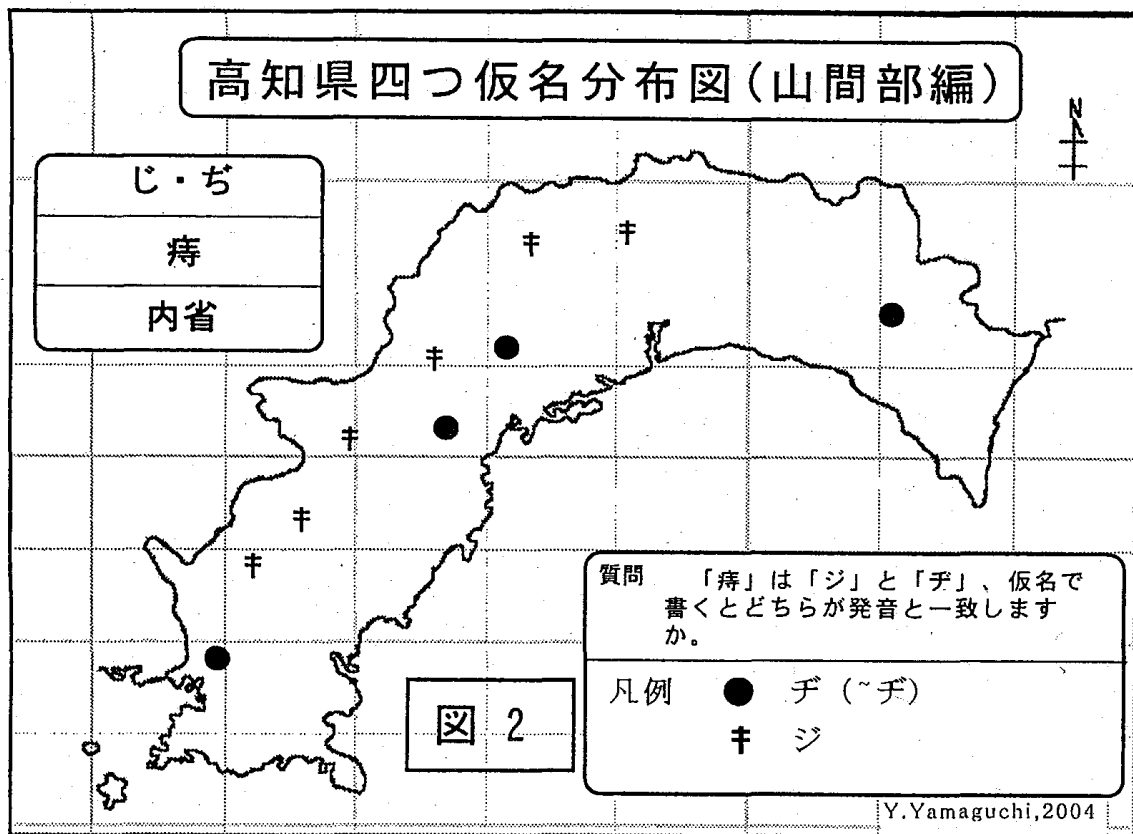
質問項目
缶詰
(音声)

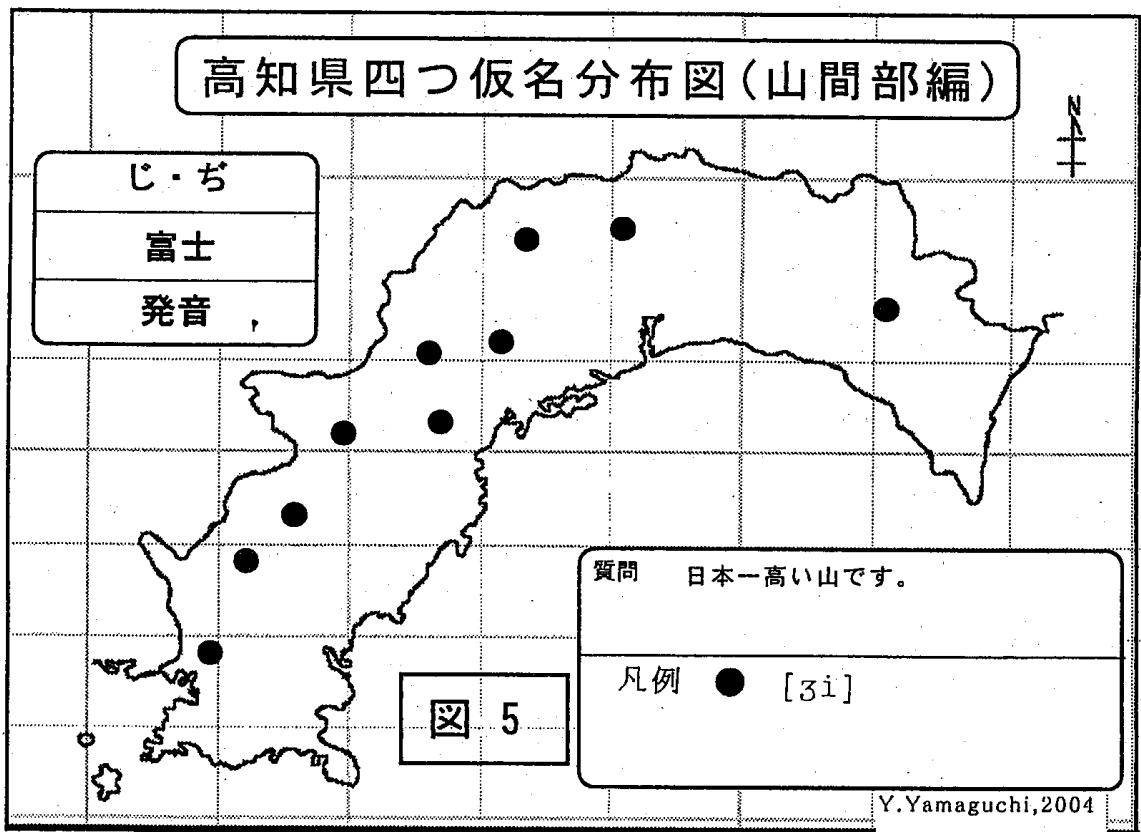
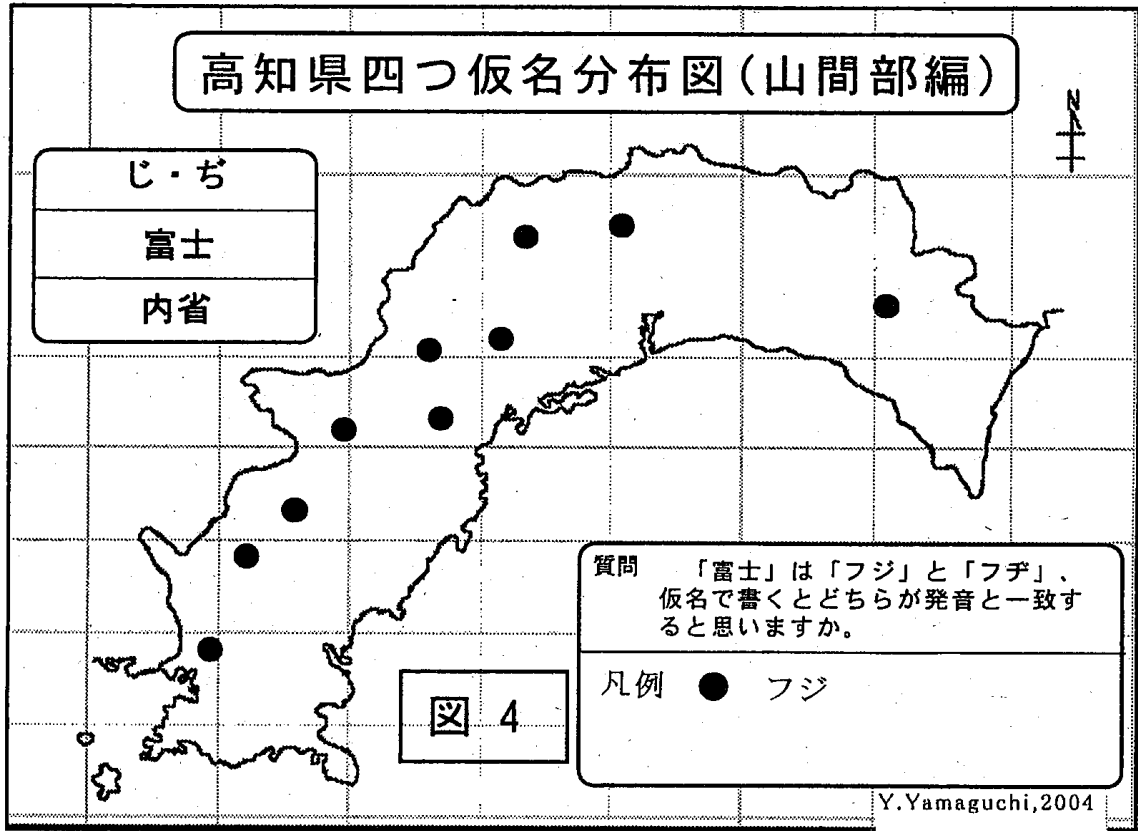
表12

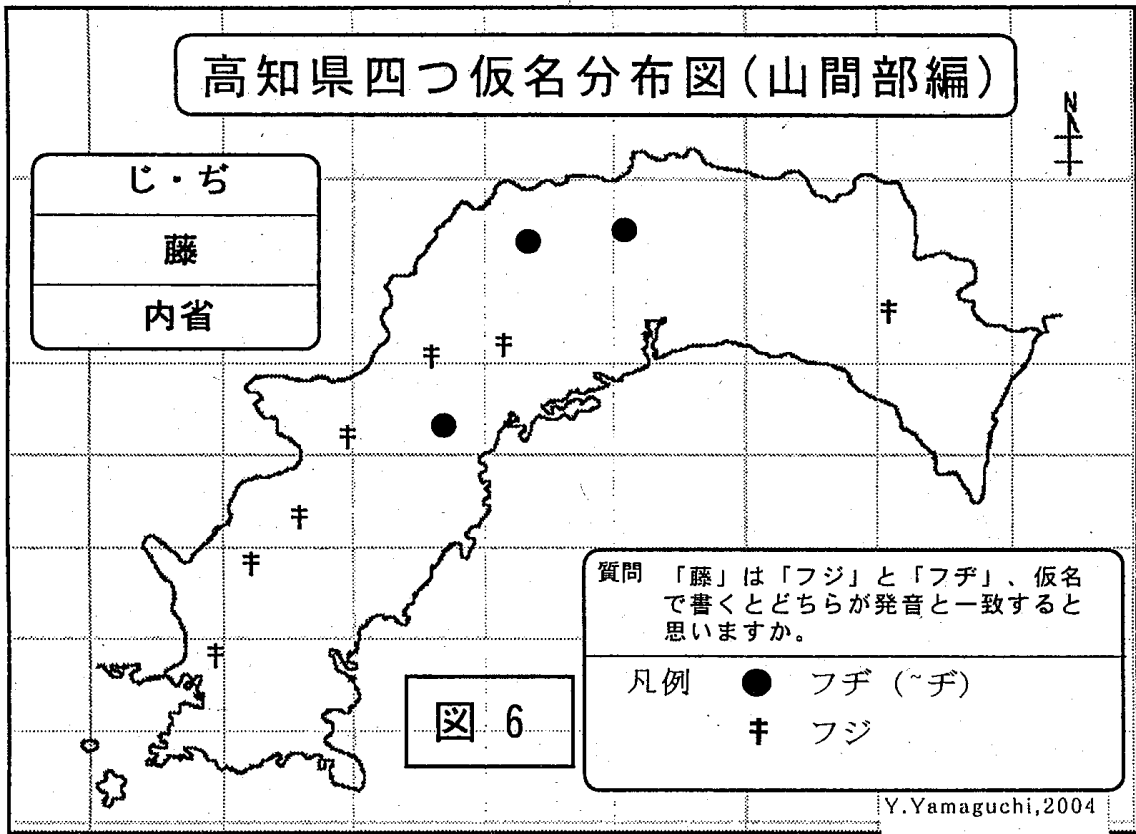
質問 ミカンやいわし・さんまなどが缶に入って売っているものです。これを開けるには缶切が必要です。

凡例 ★ [du] ([~du])
▲ [dzu] ([~dzu])
卍 [zu]
■ その他



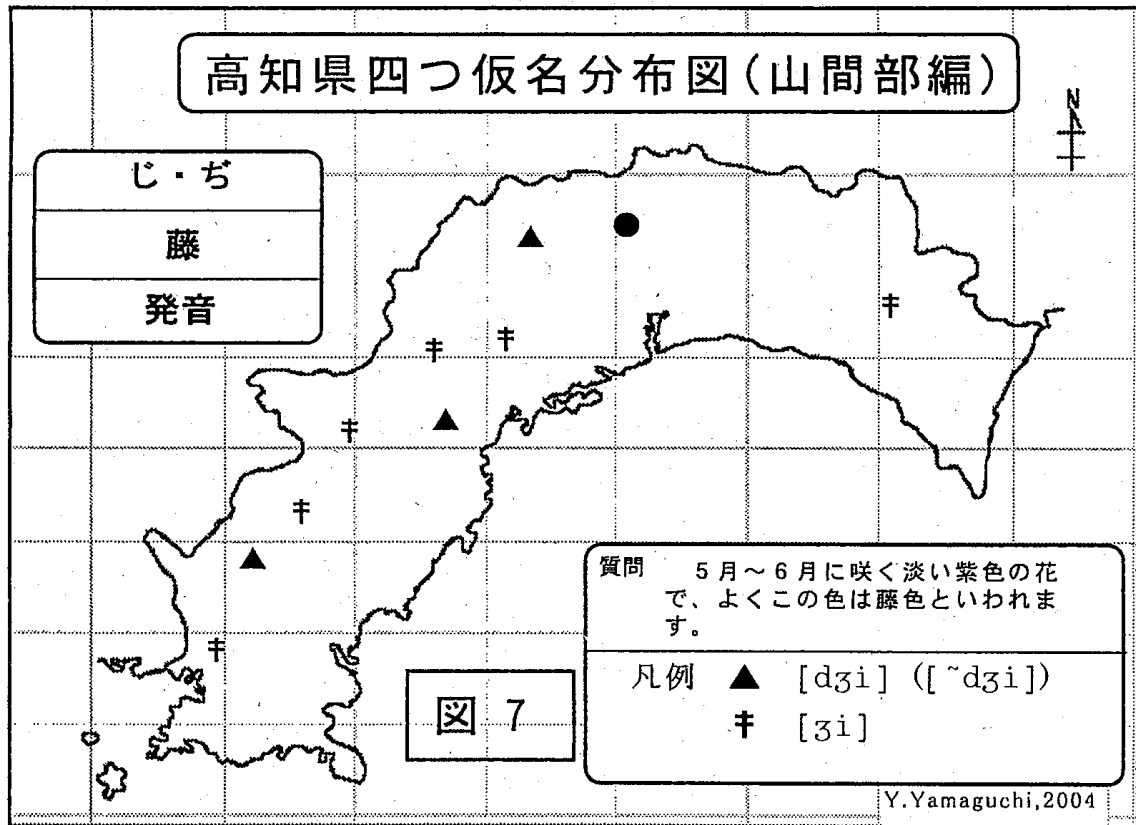






質問 「藤」は「フジ」と「フヂ」、仮名で書くとどちらが発音と一致すると思いますか。

凡例 ● フヂ (~ヂ)
キ フジ



質問 5月～6月に咲く淡い紫色の花で、よくこの色は藤色といわれます。

凡例 ▲ [dʒi] ([~dʒi])
キ [ʒi]

